

仏教学の進展と今後の展望

——人生六十年の思い出を語る——

舟 橋 尚 哉

定年退職を迎えるにあたり、慣例により、記念講演をするようにとの、仏学会の係のロバート先生より、お話がありました。昨年はそういう催しをやらなかったから、今年もやめにしたらいかがですか、といったのですが、昨年は例外であって、今年は是非やって下さい、とのことでしたので、何かお話しをしなくてはならないことになりました。

最初は専門の「唯識思想」について、お話ししようかとも思いましたが、この後にお話しされる片野先生も「唯識」が専門であるし、第一、私が「唯識」を語ると、どうしてもむづかしい話になりがちなので、ここにあるように、「仏教学の進展と今後の展望」というような、とりとめもない大きな講題を出しました。

そこで最近思うのですが、科学の発達はここ五、六十年の間に目をみはるものがあります。終戦直後（昭和二十年）の何もない時代から、今のような目覚ましい復興ができたのです。

初めは焼け跡にバラックが建ち、木造建築が建ち、ビルが建ち、やがて高層ビルが建ちました。ラジオしかなかった時代から、テレビ放送が始まり、カラーテレビになり、衛星放送になりました。

昔、薪まきを燃やして、おくとかまどさんでご飯を焚たいていたのが、ガスや電気で焚けるようになり、更には全自動になり、

タイマーをセットしておけば、寝ていても焚けるようになりました。

ハンドルを廻して、洗ったものを絞った洗濯機だったものが、自動攪拌絞りの二槽の洗濯機、更には全自動の一種の洗濯機になりました。

最初は水を細かくして、それによって冷やす冷蔵庫^①でしたが、霜がついたりするので、週一回か二回位、中のものをすべて出して掃除しなくてはならない、やっかいな冷蔵庫から、電気ですべて冷やし、氷まで出来る便利な冷蔵庫になり、霜取り装置まで付くようになって、その後、色々と改良されて、今のような冷蔵庫になりました。

活字を組んだり、英文や邦文のタイプライターで打っていたものが、コンピュータで文字が印刷できたり、コンピュータによるインターネットや携帯電話の普及（^{アイ}モードなど）やファックスや最近では光ファイバーによる高速化の時代にも入ってきた感があります。

このように科学の発達、文明の発展は目覚ましいものがあるのに、「仏教学」はどうかと考えてみたわけです。

確かに昨年（平成十三年六月）、日本印度学仏教学会設立五十周年が東京大学で開催され、私も参加しましたが、設立の時は少人数であったが、今では何千人という会員になり、発表者も人数制限しなくてはならないほど、研究発表希望者が増えたとのことでした。

サンスクリットやパーリ語やチベット語を研究する学者も、それを学ぶ学生も増え（最もごく最近ではサンスクリットを必修からはずしたためか、学生はやや減ってきたが）、時には新しいサンスクリットのテキストや断片が発見されたりして、学会で大変話題になったこともありました。

例えば『大乘阿毘達磨集論』(Abhidharma-samuccaya) の註釈書である Abhidharma-samuccaya-bhāṣya や、また『瑜伽師地論』(Yogācāra-bhūmi) は菩薩地 (卷三十五—卷五十 Bodhi-satvabhūmi)^② しか見つかっていなかったが、The

Yogacārabhūmi (漢訳卷一—卷十) や Śāvakabhūmi (声聞地卷二十一—卷三十四) のサンスクリットが見つかり出版されたりして、大いに話題になりました。しかし科学の発達と較べれば、目立たない、微々たる進展としか、いえないうように思われます。

今だに宇井博士の『印度哲学研究』は第一卷(大正十三年)から第六卷(昭和五年)のものが、昭和四十年頃に印度哲学史(昭和七年)を附して再版され、また昭和五十七年頃や平成二年頃には十二冊本が再再版され、今でも近代仏教学を知る上に重要な書となっています。

特に仏滅年代論(第二卷)などは、当時は百年も仏滅年代を新しく見るので、注意して使うようにといわれていたが、最近ではこの説を三年修正した説が主流となっています。

また、「玄奘以前の印度諸論師の年代」(印度哲学研究第五卷)も、一部修正があるとはいえ、今でも基礎資料として重要な位置を占めています。

山口益博士の『中辺分別論』に関する三冊本は、昭和十年頃に出版されたが、鈴木学術財団から昭和四十一年に再版されました。これらは初期唯識思想を知る上に、今でも基礎的な、重要な書物であるため、古書でも高値がついているようです。

「弥勒の五部論」に関して、弥勒(Maitreya マイトレーヤ)という人物が歴史的にいたとする宇井伯寿博士の説や、弥勒は信仰上の弥勒であって、実際は無着(Asaṅga アサンガ)が造ったとか、あるいは無着以前の複数の諸論師が造ったものを弥勒造としたとか、種々の説がある中で、従来は五部論は弥勒のもので、これらはほぼ同じ頃に造られたと考えられていたが、最近では五部論の一つ一つを検討してみないと、よくわからないが、特に『法法性分別論』に関しては、弥勒のものとは考えられないというのが、定説となりつつあります。(拙稿『唯識思想の成立と展開』)

——唯識を学ぶ人々のために——『仏教学セミナー』第七十一号六頁参照。

弥勒の五部論といわれるものは、中国伝とチベット伝とで異なるが、両伝に共通する論書は『大乘莊嚴經論』と『中辺分別論』の二論だけであります。この二論は梵・藏・漢の三本が揃っており、研究する書物としては申し分ない重要な論書であります。

五部論の一つとして、チベット伝には数えられていないが、中国伝には五部論の一つであり、最も重要な論書の一つである『瑜伽師地論』は、卷七十七―卷七十八までが唯誠の所依の經典である『解深密經』と一致しているので、大乘經典の成立を考える上で重要であります。

また大乘仏教がどのようにして生まれ、成立したかについては、まだはつきりしないが、最近、新しい考え方も提示されています。

すなわち、従来は根本分裂で上座部と大衆部だいしゅうぶとの二部に分かれていた大衆部の人々は進歩的な人々で、そこから大乘仏教が興ってきたといわれていたが、平川博士はそこにストウパー崇拜を考え、ストウパーを守り、維持する在家の人々の集まりの中から、大乘仏教は興ったのだと主張されました。^⑦

ところが最近、大乘仏教は在家教団からではなく、出家教団の中から生まれたという説が有力となってきました。^⑧ 仏教学の進展といっても、科学の発達と較べれば、比較にならないほど遅々たるものです。しかし授業で用うるテキストの準備の仕方や資料作りは非常に進歩したといつてよいと思います。

昔、私が学生の頃は山口先生の授業では『中論』のテキスト de la Vallée Poussin : Mūla Madhyamaka Kārika を使っておられたが、チベット訳は図書館から北京版の西藏大蔵経を借りてきて、ガリ版で交代して刷ったものを用いました。^⑨ それが今では影印北京版が出版されたので、簡単にコピーすることができるようになりました。

また昔はコピー機もなかったので、安井先生の『楞伽經』の漢訳テキストは、大正大蔵経を日光写真のように、ガラス二枚の間にはさみ、クリップでとめ、大きなカンにアンモニアを入れて青焼きにしたように思います。(後に

電気の光線による青焼きになりました。今はコピー機全盛時代といってよいと思います。

昔の青焼きは写りが悪かったため所々に不鮮明なところがあつたりすると、すぐに元の大正大蔵経を確かめて見たのですが、最近のコピーが鮮明になったので、元の大正大蔵経を見る必要がなくなり、大正大蔵経の何巻からコピーしたのかも知らない学生が増えてきました。（『中辺分別論』など私の授業では、テキストに入る直前の授業で、大正大蔵経の何巻の何頁からのコピーであるかを説明するのですが、そのときに欠席しているのか聞いていない人が多いようです。）

コピー全盛時代のためか、テキストの本を買わない学生が多いようです。（昔は殆どの学生がテキストの本を買っていました。）ましてや仏教の學術書を買う学生はまれになったと学内書店の御主人さんがこぼしておられました。

もつとも昔はゼミといつても、仏教学専攻は第一講座から第四講座まであり、各一名の教授または助教教授が揃っていたのですが、専攻の学生は一講座三名―五名くらいで、私の学年など、インド大乘仏教に六名が専攻したが、山口先生は今年が多いなあといつておられたように思います。（ちなみに原始仏教といえば、その年三名の専攻生だったかと思えます。）

現役（十八才）の女子学生が入学してきたのも、私の入学した次の年からだったように思います。（それ以前は、どこかに勤めていて、仏教を本当に学びたくて来られた人か、あるいは尼僧の方が多かったように思います。）

それでは今後の仏教学はどのようなようになっていくのでしょうか。昨年十二月十五日の朝刊に一斉に報道された『維摩経』原典写本を発見』のニュースには、びっくりしました。報道によれば、大正大学の総合仏教研究所がポタラ宮にあるダライ・ラマの経蔵で見つけたとのことですが、これらの写本はもともとラサの西約五百キロのツアム地方の名刹シヤル寺の所蔵であつたが、中国文化大革命で同寺（シヤル寺）が破壊された際に北京へ運ばれ、多分、中国民族図書館にあつたと思われるが、最近（とはいつても数年位にはなるが）、ポタラ宮に持ち込まれたとみられ

ています。

ラーフラ、サンクリトヤーヤナがチベット寺院シャル寺で見つけて写真版にして持ち帰ったものの中に、有名な『瑜伽師地論』（巻一―巻五十の大部分）の梵本や『大乘阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*）の注釈書、*Abhidharmasamuccaya-dhāṣya* などがあり、『瑜伽師地論』については、大正大学で出版の準備を進めていると聞いています。

今から十数年前、大正大学で日本仏教学会があった折、特別展示があり、『瑜伽師地論』だったと思うが、ラーフラ、サンクリトヤーヤナの写真版では、大きなクリップにはさまれて見えなくなっている部分があったのに、その時の写真はすべてが鮮明に写し出されているのを見て、ラーフラ、サンクリトヤーヤナの写真版の原本は行方不明だと聞いていたのだが、実際はシャル寺に保管されていて、それが中国民族図書館へ移管されたことを、その時確認できたように思います。

その中国民族図書館にあったものが、夜中にチベットへ何台かのトラックで運んでいるということを確認かチベット学会で漏れ聞いたように思うが、それが今、ポタラ宮のドライ・ラマの経蔵にあったことになりました。

これからも梵本のテキストや断片が発見されるかもしれないが、しかしそうはいつても、今まで梵本がないと思われていたテキストの完全な梵本が見つかることはまれであると思います。発見されるとすれば、チベットかネパール寺院、あるいは旧ソ連などが考えられるが、それにしても中国（現在はチベットも中国の一部であるから、これは例外です）には、あれだけサンクリット原典から漢訳されたと思われるのに、何故、その元の梵本テキストが見つからず、どう処理してしまったのでしょうか。

多分、焼き捨てられたのではないかとも思われるが、唯一の例外は敦煌です。敦煌では仏像が正面に安置されているが、その横の壁を破ったとき、経典などが隠されていて、敦煌文書が見つかったといわれています。

どうして敦煌だけに、原典が隠されていたのか、はつきりはわかりませんが、チベット系の王が統治していたときに、後世に残そうとして隠されたのかもしれませんが。それを井上靖氏は「敦煌」で取り上げ、紹介して、井上靖氏の推理を入れて発表されました。映画化もされたので、皆様、よく御承知のことと存じます。

科学の発達が著しいのに較べて、仏教学の進展が遅々として進まないことに、初めは一種のいらだちのようなものを感じていましたが、よく考えて見ると、仏教の真理は研究が進むことによつて、次々と明らかになることはよいことであるが、仏教の真理それ自体が、仏教学の研究によつて変わつてしまつては工合が悪いと思われます。そう考へると、仏教学の進展が科学の発達と較べて遅いことにも納得がいくように思われてきます。

これからも漢訳とチベット訳しか見つからないテキストとか、漢訳しかないもの、チベット訳しかないもの、などのサンسكريットが発見されるということもあるでしょう。それが重要な経典や論書であればあるほど話題になるでしょう。

新しい資料といへば、最近、世界の四大文明についても、昨年、東京や横浜で四大文明展が開かれ、各地方でも展示されました。

(1) メソポタミア文明

(2) エジプト文明

(3) インダス文明

(4) 黄河文明

これらの四大文明はいずれも古く、文明の発祥地として注目されてきました。ところが、最近、中国の長江(揚子江)の上流で、黄河文明より古い文明が見つかり話題になりました。もしそれが本当なら、四大文明ではなく五大文明であるといわなくてはならないと、ここ数年前から授業で言ってきました。

ところが今年一月十七日の京都新聞の朝刊が伝えるところによれば、インド西部で紀元前七五〇〇年（今から九五〇〇年前）の世界最古の都市がインド西部、キャンベイ湾の水中に沈んでるのが見つかったとのことです。もしこれが本当なら、四大文明、五大文明ではなく、六大文明ということになるのかもしれませんが。

見つかった遺物は木材の破片、つぼのかげら、化石化した骨と、建築材とみられる物質などで、インドのジョン科学技術相は

「インド国立海洋技術研究所が現物から回収した紀元前七五〇〇年頃のものともみられる木材など人口遺物の一部は、現在のキャンベイ湾に非常に古い文化があった事実を示している。この都市はその後、水中に沈んだらしい」と語ったと言われます。

通説では人類最初の都市は紀元前三五〇〇年頃、現在のイラクに位置するシュメールの涇谷に出現されたとされるティグリス、ユーフラテス両河流域のメソポタミア文明であったが、それをほるか四〇〇〇年もさかのぼる都市文明が発見されたことになり、従来の定説が覆されたともいえよう。

「仏教学の進展」は「科学の発達」のような、目を見張るものはないかもしれませんが。しかし「科学の発達」が人間の豊かな暮らしにいつも役立つとは限りません。悪用されたり、戦争の兵器などに使われたりすることもあります。それらのことを抑制するものは、あるがままに物事を見る、如実智見まをであり、智慧の眼ではないでしょうか。

（本稿は平成十四年二月十三日、大谷大学仏教学会主催「退職記念講演会」の講演を加筆修正したものである。）

注

- ① 冷蔵庫の初代は昭和五年だと、テレビで放送していましたが、私が見知っているのは戦後の（昭和二十年）間もない頃の冷蔵

庫だったと思います。

- ② Woghara: *Bodhisatvabhūmi* 1, 2 (1930).
Dutt: *Bodhisatvabhūmi* (1966).
 - ③ Bhattacharya: *The Yogācārabhūmi Part I* (1957).
 - ④ Shukla: *Śāvakabhūmi* (1973).
 - ⑤ 宇井伯寿著「印度哲学研究」(第一卷)(甲子社書房 大正十三年)が出版されて以来、何度も再版されているということは、それだけ需要があり、価値があるということである。
 - ⑥ アショーカ王の即位年代が従来、B.C. 271 頃であったが、最近では B.C. 268 頃になったので、宇井説を三年修正した中村元説が主流となっている。
- もっとも南伝説や衆聖点記説もあるが、今から十年位前に、Göttingen における「仏滅年代について」のシンポジュームの結果は、北伝説の方が有力説となったようである。
- ⑦ 平川彰博士「初期大乘仏教の研究」(春秋社 昭和四十三年) 特に五五〇頁以下参照。
 - ⑧ 佐々木閑氏「大乘仏教在家起源説の問題点」(『花園大学文学部研究紀要』第27号一九九五年) グレゴリー・シヨペン著、小谷信千代訳『大乘仏教興起時代、インドの僧院生活』(春秋社 二〇〇〇年)
 - ⑨ 拙稿「『大乘莊嚴經論』の研究とテキスト校訂」(大谷大学図書館報『書香』第17号 平成十三年九月刊) 二二頁参照。